

『蘇悉地經』にみられる灌頂儀礼をめぐって

駒井 信勝

0. はじめに

『蘇悉地羯羅經』(以下『蘇悉地經』)は善無畏三蔵(637-735)によって漢訳された。梵本は残されていないが漢訳三本と蔵訳とがある。

(漢訳)

正本 『蘇悉地羯羅經』(三卷三十七品) 『大正蔵』 18 卷 No. 893

別本一 『蘇悉地羯羅經』(三卷三十八品) 『大正蔵』 18 卷 No. 893A

別本二 『蘇悉地羯羅經』(三卷三十四品) 『大正蔵』 18 卷 No. 893B

(蔵訳)

legs par grub par byed pa'i rgyud chen po las sgrub pa'i thabs rim par phye ba

『妙成就大タントラ』より「成就方便章」Toh. No. 807/Ota. No. 421

漢訳は全て上・中・下の三巻からなるが、正本・別本一と別本二では中下巻が入れ替わっている。また、正本には「扇底迦法品第十三」「補瑟微迦法品第十四」「阿毘遮嚕迦品第十五」があるが別本一・二にはない。他にも真言が三本の間で異なる等、幾つかの異同がある。蔵訳は正本と最も対応している¹⁾。

この經典は真言宗においては、弘法大師が『真言宗所学経律論目録』の中で律部に録し、天台宗では、特に胎金兩部に並んで蘇悉地を大法として重視している。しかし、蘇悉地部の成立やその内容は、必ずしも明確ではないようである。三崎良周氏は、蘇悉地が胎金と並んで三部の大法とされるには、灌頂か灌頂に準ずる根本印信やその教理がなければならないとして考察をしている。まず、蘇悉地灌頂が兩部の灌頂と同じく、阿闍梨位灌頂であるかという問題に関して、円仁の『蘇悉地經略疏』第七の「本尊灌頂品」より以下の一文を引いている。

凡そ曼荼羅に入るに必ず四種の灌頂あり。一は除難、二は成就、三は増益己身、四は得阿闍梨位なり。今此の品中の所説の灌頂は、即ち成就の義であり、除難及び増益を兼ね。義旨知るべし。²⁾

これに関連して円珍撰の『請弘伝真言止観兩宗官牒款状』を見る限り、兩部の

学法灌頂を受け、併せて両部諸尊瑜伽と蘇悉地大法を受け、両部の阿闍梨灌頂を受伝されたが、蘇悉地灌頂のことは記されていない、と問題提起している³⁾。また、蘇悉地灌頂の本尊が何であるかという問題にも言及している。そこでは、曼荼羅や灌頂図を寓目する機会がなく、僅かにあるもその伝承が不明瞭であるとし、この灌頂の本尊が明らかでないことは、蘇悉地が極めて重要なものとされながら、その実態が明確でない最大の課題としている⁴⁾。

勿論、蘇悉地部と言った場合には『蘇悉地経』のみではなく、供養法やその他の経典・儀軌などの関連を考慮し、時代の流れや伝統教学と共に考察していく必要があり、台密に於いて伝承されている蘇悉地灌頂に対する考察についてはここでは立ち入ることはしない。本稿では、後に上記のような問題を孕む蘇悉地灌頂の根本たる『蘇悉地経』に説かれる灌頂儀礼が、どのような構造を持ち、また如何なる意義を有するのかについて考察していきたい。

1. 四種灌頂について

『蘇悉地経』の灌頂が成就の義であると指摘されていることは上述の通りである。円仁の述べる四種灌頂の典拠の一つに『蕤呬耶経』がある。この経典は『大日経疏』や『蘇悉地経略疏』に度々引かれ、一連の灌頂儀礼が詳細に説かれる。その「分別護摩品第十」には、四種の灌頂について以下のように説かれている。(漢訳)

凡そ曼荼羅に入るに必ず四種の灌頂あり。一には除難、二には成就、三には増益自己、四には得阿闍梨位なり。是の如きの灌頂の法は前に已に広説せり。⁵⁾

(蔵訳)

尊の部属等を見ることより灌頂は四種である。師は三昧によってそれらをよく知り、如応になすべし。阿闍梨位を得るので第一と称されるのである。諸々の明真言を成就するので第二と説かれる。障碍等をよく降伏するので第三と称される。第四は富を得るためと廣大儀軌に説かれる。第一の廣大儀軌を我は最初に説いたのである。⁶⁾

この一文によれば、灌頂には阿闍梨位を獲得するもの、様々な明真言を成就するもの、諸々の障りや災難を除くもの、富や名声を得るものの四種があるということになる。そして、『蕤呬耶経』に大段的に説かれる灌頂はこの四種の内の何

『蘇悉地經』にみられる灌頂儀礼をめぐって (駒井)

れの灌頂に属するかと言えば、得阿闍梨位灌頂であり、大塚氏も指摘している通りその目指すところは受者に菩提を獲得させることである⁷⁾。このことから、『蕤呬耶經』の成立時期に於いては、この四種灌頂の分類はある程度の認識があったと考えて問題ないであろう。本稿で問題とする『蘇悉地經』も、この『蕤呬耶經』と同時期に成立したと考えられ、タントラの四分類(所作・行・瑜伽・無上瑜伽)でも同じ所作タントラに配される。またこのような經典には『蘇婆呼童子請問經』もある。そこで、『蘇悉地經』の灌頂を見ていく前に、『蕤呬耶經』・『蘇婆呼童子請問經』の灌頂について概観しておきたい。

『蕤呬耶經』については上で述べた如く阿闍梨位を得る灌頂であり、そのための灌頂儀礼として、次のような瓶水加持と灌頂が行われる。

(漢訳)

其の阿闍梨は普く応に曼荼羅中の一切の諸尊を頂礼すべし。灌頂の為の故に、至誠に啓請せよ。即ち応に前に持誦すること百遍せし所の瓶を持し奉るべし。徐徐に当に曼荼羅を遶るべし。遶ること三匝し已らば、復た三種の真言を以て其の瓶を持誦せよ。其の頂上に於いて手印を作し、並びに根本の真言を誦して、還た此の真言を誦して彼に与えて灌頂せよ。⁸⁾

(藏訳)

総じて、それらの儀軌を広く行うならば、心によって曼荼羅すべての諸尊を賢者は勧請して、念誦を百遍なした瓶を正しく持ち、ゆっくりと曼荼羅を三度遶る。根本の真言すべてを唱え、智慧あるものによって灌頂がなされる。次に印を結ぶとき、真言の智慧の力によって頭頂に当てる。⁹⁾

ここでの灌頂に用いる瓶は、漢訳では「三種の真言」、藏訳では「根本の真言すべて」によって加持するのである。この真言が如何なるものかは詳細不明であるが、ここでは曼荼羅に配置された諸尊を代表する尊格により瓶を加持して灌頂を行い、弟子を阿闍梨へとしていくのである。

次に『蘇婆呼童子請問經』をみると、

(漢訳)

彼の障りの著せる人を将いて坑中に入れ、面を東に向けて坐せしめ、念誦の人は壇の西面に面を東に向けて坐し、真言一百八遍を誦し已われ。然る後に、彼の所置の四角の瓶水を取り、還りて阿蜜唎囉枳当加此れ赤色と云う明王主、及び結唎吉囉明王、並びに捺囉弭良拏明王等の真言を以て、持誦の数一百八

遍を過ぎ已り、彼に与えて頂に灌げ。是の如く四瓶を次第に応に灌ぐべし。此の法を作し已わらば、彼の障に著せし人は即ち解脱を得るなり。此の曼荼羅は、独り能く一切の毘那夜迦を除くのみに非らず。¹⁰⁾

(蔵訳)

赤色身尊とキーリキーラ尊とドラミダ尊[の真言]によって百遍誦し、曼荼羅を壁に安置すべし。次に塗香・焼香等を献じ、障碍によって取り憑かれた者を東方に向け、曼荼羅の中心地の幸福の座に安置し、念誦をなして各々の瓶によって洗淨すべし。すると毘那夜迦などより解放されるであろう。¹¹⁾

この灌頂は、明王等の真言で加持した瓶水を毘那耶迦等の作障者に憑依された者に灌ぎ、その害等を取り除くものであり、大塚氏も指摘している如く『蕤呬耶経』の説く四種灌頂の除難灌頂に位置づけられるとの見解を示している¹²⁾。

以下、『蘇悉地経』の灌頂について見ていくわけであるが、同時期に成立したと考えられ、また同じ所作タントラに配される『蕤呬耶経』・『蘇婆呼童子請問経』のように、四灌頂の何れかに宛がうことが可能か、可能ならば四種の内のどの灌頂に位置づけられるべきかについても注意を払っていくこととする。

2. 『蘇悉地経』の灌頂儀礼について

『蘇悉地経』の一連の灌頂儀礼は「除一切障大灌頂曼荼羅法品」¹³⁾に説かれる。この品に説かれる灌頂儀礼の一連の流れは以下の如くである。

浄地→曼荼羅作画・瓶配置→曼荼羅供養→三種護摩→瓶加被→灌頂→護摩

さて瓶水灌頂の場面であるが、『蘇悉地経』では曼荼羅の作画が終わり、三種の護摩が終わると灌頂に用いる瓶の加持を行う。ここで曼荼羅にそれぞれ配置された瓶と、その瓶に対する加持の方法を見ていきたい。

(漢訳)

如法に諸の真言を供養し已り、及び護摩し已り、前の安ける瓶を、為す所の者に隨いて彼の真言を誦して、用て加被せよ。①本尊の前に於いて安ずる所の瓶は、還りて彼の真言を用いて之を加被せよ。其の②台の内の瓶は、応に明王の真言を用いて、加被を作すべし。③門に当りて軍荼利の為に安置する所の瓶も亦、須く彼の真言を用いて加被すべし。台の曼荼羅の東面の両角に於て安置する所の瓶の④東北の角は、部心の真言を以てし、⑤東南の角は、部母の真言を用てし、⑥西北の角は、能弁の諸真言を用てし、⑦西南の角は、

『蘇悉地經』にみられる灌頂儀礼をめぐって（駒井）

一切の真言を用てせよ。¹⁴⁾

(蔵訳)

一切の尊等をよく供養して、護摩を随意になすべし。それから、前に安置した瓶に自身[の尊]の真言によって讚嘆すべし。①[本]尊の目の前に安置する一つの[瓶]は自身[の尊]の真言によって誦すべし。②曼荼羅の中心に安置する[瓶]は明王[の真言]によって誦すべし。③門の前に安置した[瓶]は金剛忿怒[の真言]によって誦すべし。部心の明呪によって④⑤東の両隅[の瓶]を誦すべし。一切の行為をなす真言と、他の一切の真言によって、⑥⑦西の両隅に安置する瓶に対して作法通りに誦すべし。¹⁵⁾

下線部の箇所がそれぞれ灌頂に用いる瓶を安置する箇所である。漢訳・蔵訳共に曼荼羅に安置する瓶の数は七瓶で、その瓶をそれぞれ真言によって加持していく。本尊の前に安置した瓶に本尊の真言を誦すのであるが、ここで言う本尊とは定まった特定の尊格ではなく、受者の本尊であろう。また、明王・部心・部母も受者の本尊が属す部族の明王・部心・部母と考えられる。漢訳の『蘇悉地經』では、仏・蓮・金の三部を詳細に整理して説いている。「真言相品第二」では、

- 仏部の中には仏眼を用う。号して仏母と為す。¹⁶⁾
- 蓮華部の中には観音母を用う。号して半拏囉縛悉寧と為す。¹⁷⁾
- 金剛部の中には執金剛母を用う。号して忙莽鷄と為す。¹⁸⁾
- 仏部の中には明王真言明王を用う。号して最勝仏頂と曰う。¹⁹⁾
- 蓮華部の中に亦た明王を用う。号して訶野訖利囉と曰う。²⁰⁾
- 金剛の中に亦た明王を用う。号して蘇囉と曰う。²¹⁾

また「持戒品第七」では、

(漢訳)

仏部の心真言に曰く。爾曩爾迦輕。蓮華部の心真言に曰く。阿夫路力迦輕。金剛部の心真言に曰く。囉日囉地嚙二合迦輕。²²⁾

(蔵訳)

部族の心真言三字によって、それぞれ念誦を行うことによりクシャ草を浄め、無名指に繫げ。jinajik, ārolik, vajradhrk/²³⁾

と、三部に於いてそれぞれ体系的に分類しているのである²⁴⁾。さらに、漢訳では三部の大忿怒を、

- 仏部の中に大忿怒を用う。号して阿鉢囉氏多と曰う。²⁵⁾

智山学報第六十二輯

- 蓮華部の中の大忿怒、号して施嚩嚩訶と曰う。²⁶⁾
- 金剛部の中の大忿怒、号して軍荼利と曰う。²⁷⁾

と分類している。灌頂に用いる瓶を加持する箇所をまとめると以下のようになる。

瓶	漢訳	蔵訳
①本尊の前	本尊の真言	自身の尊の真言
②曼荼羅の中	明王の真言	明王の真言
③門の前	軍荼利の真言	金剛忿怒(軍荼利)の真言
④東北の角	部心の真言	部心の真言
⑤東南の角	部母の真言	
⑥西北の角	能弁の諸真言	一切の行為をなす真言
⑦西南の角	一切の真言	一切の真言

次に、以上のように加持した瓶によって行われる灌頂の箇所を見ていく。

(漢訳)

諸の作障を除遣せんと欲わんが為の故に、(1)先ず軍荼利の瓶を用い、而して灌頂に用いよ。(4)第四に応に所持の真言を用いて、灌頂に用うべし。其の(2)(3)余の二瓶は意に随いて用いよ。²⁸⁾

(蔵訳)

(1)第一に障碍等を取り除く為に[軍荼利の瓶によって]灌頂をして準備すべし。(2)(3)中間に[曼荼羅の]中の[瓶]等によって[灌頂をすべし]。(4)最後に自身の[尊の真言の瓶]によって誦して[灌頂すべし]。²⁹⁾

蔵訳はかなりの部分を補ったが、漢訳と合わせると凡そこのようになる。最初は軍荼利により加持した瓶を用いて受者の障碍を取り除き、最後は自身の本尊で加持した瓶によって灌頂を行う。しかし、その他の瓶はどうかと言えば、漢訳では「余の二瓶を意に随いて用いよ」と説かれ、蔵訳では「中間に[曼荼羅の]中の[瓶]等によって[灌頂をすべし]」と説かれるのみである。蔵訳では幾つの瓶を用いるか定かではないが、漢訳に従えば四瓶で、二番目と三番目に関しては定まった規定がないようである。『蘇悉地経』の灌頂儀礼で確かなことは、最初は受者の障碍を取り除く為に軍荼利の瓶によって灌頂されること、そして最後に自身の本尊であるところの瓶によって灌頂されるということである。最後が自身の本尊

『蘇悉地經』にみられる灌頂儀礼をめぐる（駒井）

による瓶の灌頂である理由は、正しく受者がその尊による成就法の悉地を得るためであろう。

- (1) 軍荼利の瓶……………障碍を取り除くため
- (2) (3) 他の瓶のうちのどれか二つ……………詳細不明
- (4) 受者の本尊の瓶……………本尊の成就法の悉地を得るため

3. 『蘇悉地經』の灌頂儀礼の意義について

では、『蘇悉地經』が想定する灌頂儀礼の意義について考えてみたい。「除一切障大灌頂曼荼羅法品三十一」の冒頭部分には以下のように説かれている。

(漢訳)

若し成就の法を起首せんと欲わば、先ず応に諸々の悉地の具を備え弁ずべし。次に応に護摩の法を以て本尊真言を加威して、及び自ら灌頂すべし。灌頂せんと欲わば、曼荼羅を作して、如法に供養すべし。灌頂を作し已りて、然る後に起首して成就法を作せ。³⁰⁾

(藏訳)

成就の為に必要なことなどは、先ず初めに意に善いことを思い、智慧を備えたものが一切の支具をよく集め、護摩作法の儀軌によって真言を悉く満足させ、灌頂をなせと儀軌に述べられる。次に成就[の法]を始めるべきである。先ず曼荼羅を画いて、儀軌通りによく供養して、それから自ら如法に灌頂して作業等を始めよ。³¹⁾

つまり、成就法を始める時は、

1、悉地の道具を準備 → 2、護摩によって真言を満足させる → 3、灌頂という順番があり、その灌頂儀礼の次第として、

1、曼荼羅作画 → 2、曼荼羅諸尊供養 → 3、灌頂 → 4、成就法

と示され、次第の最後には目的とした成就法がくるのである。この様に『蘇悉地經』の灌頂は成就を得るための灌頂といえる。このことは『蘇悉地經』がそもそも様々な成就法を説く經典であることから納得出来よう。では、どのような者達がこの經典を必要とし、この灌頂を受けていたのか考えてみたい。上記の得阿闍梨位灌頂に位置づけられる『菴呬耶經』の灌頂儀礼には、投華得仏が説かれる。これは、受者に覆面をさせ、曼荼羅に向かって華を投げさせ、諸尊の中から本尊を選ぶという儀礼である。その役割からしても、投華得仏は灌頂儀礼と密接

智山学報第六十二輯

な関係にあり、『大日経』や『金剛頂経』等にも見られるものである。しかし、投華得仏はこの『蘇悉地経』には説かれない。さらに、上記の通り、瓶水灌頂の所では「所持の真言」・「自身の尊」というように、既に受者の本尊が定まっているように思われる。このことは、『蘇悉地経』の灌頂は、既に別の灌頂により自身の本尊が決まっているか、或いはそれに準ずる何かしらの方法により予め本尊が決まっているものが行う灌頂であることを予想させる。この箇所に関して「真言相品第二」の一部を引用すると、

(漢訳)

此の蘇悉地経、若し余の真言法を持して成就せざれば、能く兼ねて此の経の本真言を持すべし。当に速かに成就すべし。三部の中に於て、此の経を王と為す。³²⁾

(蔵訳)

これ[蘇悉地経]を備えて諸々の真言等に親近すれば、速やかに成就することとなる。これ[蘇悉地経]は、一切の部等の大威力ある明王である。³³⁾

と説かれている。蔵訳に「若し余の真言法を持して成就せざれば」の一文は見られないが、漢訳・蔵訳共に「能く兼ねて此の経」・「これ[蘇悉地経]を備えて」とある。ここに注目すれば、既に灌頂を受け成就法を修しているが、未だ悉地を得られない者達が、この『蘇悉地経』によってその悉地を得ると推測出来る。

4. おわりに

以上『蘇悉地経』の灌頂についてみてきた訳であるが、『蕤呬耶経』等の説く得阿闍梨位灌頂、『蘇婆呼童子請問経』の説く除難灌頂とは趣の異なるものであった。それは、既に他の經典などにより灌頂を受けた者の修法が成就しない時に、『蘇悉地経』の規則に乗っ取り、自身の本尊によって加持した瓶により灌頂することで成就を得るというものである。『蕤呬耶経』の示す四種灌頂に当てはめるのなら、正しく成就の灌頂といえる。このような灌頂の目的により、『蘇悉地経』の灌頂には特定の本尊は存在せず、受者にしたがって本尊が決定するのである。また、所謂台密の三部の大法としての蘇悉地灌頂が如何なるものかという問題に触れないことは冒頭で述べた通りであるが、三崎氏が問題にされていることに関して、『蘇悉地経』の性格のみで考えた場合には、この經典が阿闍梨位の灌頂を行わないこと、蘇悉地の灌頂の本尊が定まっていないことが理解される。さらに

『蘇悉地經』にみられる灌頂儀礼をめぐって (駒井)

は胎金の両部大法が、胎藏法のみ、或いは金剛界法のみで受伝されることはあっても、蘇悉地法が単体で受伝された形跡がなく、何かに附して特には胎藏法と共に受伝されていたことも説明がつくであろう。

最後に『蕤呬耶經』・『蘇婆呼童子請問經』・『蘇悉地經』の関係性について、さらには増益の灌頂とは如何なるものであり、何れの經典に説かれているのか等、多くの疑問が残されている。これらの問題については、今後さらに考察を加える必要があるが、いずれにしても当時のインドではこのように灌頂儀礼が様々な用途で存在し、各經典がその一端を担っていたようである。

註

- 1) 各品の異同に関しては大山仁快「蘇悉地經に関する一考察」(『密教文化』140号 1982)や、高田順仁「『蘇悉地經』「請問品」の考察」(『密教学』32号 1996)等に詳しい。また漢訳三本と藏訳の各品の対応箇所に関しては伊藤堯貫「『蘇悉地經』とインド社会」(『現代密教』13号 2000)参照。
- 2) 『大正藏』61巻 P. 472c
- 3) 三崎良周『台密の研究』(創文社 1988)P. 496 参照。
- 4) 三崎良周『台密の研究』(創文社 1988)P. 517 参照。
- 5) 『大正藏』18巻 P. 722a
- 6) Toh. No. 806 166a
 /lha yi rigs rnam mthong ba las//dbang bskur ba ni rnam ba bzhi/
 /bla ma mnyam par bzhag pa yis//de dag shes nas ci rigs bya/
 /slob dpon go 'phang thob pa'i phyir//dang po yongs su bsgrags pa yin/
 /rig sngags rnam ni bsgrub bya'i phyir//gnyis pa legs par bshad pa yin/
 /bgegs rnam rab tu gzhom pa'i phyir//gsum pa rab tu bsgrags pa yin/
 /bzhi pa 'byor pa thob ba'i phyir//cho ga rgyas ba de bshad do/
 /dang po cho ga rgyas bar ni//nga yis thog mar bshad ba yin/
- 7) 大塚伸夫「『蕤呬耶經』の曼荼羅行について」(『密教学研究』28 1996)、及び同「『蘇婆呼童子請問經』における灌頂について」(『佐藤隆賢博士古稀記念論集 仏教教理思想の研究』山喜房佛書林 1988)参照。
- 8) 『大正藏』18巻 P. 770c
- 9) Toh. No. 806 163a
 mdor na de la sogs pa yi//cho ga rgyas pa byas nas su//
 yid kyis dkyil 'khor lha kun la//mkhas pas gsol ba btab nas ni//

智山学報第六十二輯

bum pa bzlas brjod brgyar byas la//de ni legs par blangs nas su//
 dkyil 'khor dal bus lan gsum bskor//
 rtsha ba'i gsang sngags kun 'don ching//blo dang ldan pas dbang bskur bya//
 de nas bhyag rgya bcings nas su//gsang sngags blos ni spyi pos gtugs//

10) 『大正蔵』18巻 P. 725a

11) Toh. No. 805 124b

/lus da mar po dang kī li kī la dang//'gro lding pa la sogs pas brgya bzlas te/
 /dkyil 'khor 'khor yig tu ni gzhag par bya//de nas byug spos bdug spos la sogs dbul/
 /bgegs kyis brlams pa shar pyogs kha bstan te//dkyil 'khor gyi dbu sa pde ba'i stan
 la bzhag/

/bzlas brjod byed cing bum pa re res bkru//'on tang log 'dren rnams las thar bar
 'gyur/

12) 大塚伸夫「『蘇婆呼童子請問經』における灌頂について」(『佐藤隆賢博士古稀記念論集 仏教教理思想の研究』山喜房佛書林 1988)及び、同「『蘇婆呼童子經』の曼荼羅と密教儀礼について」(『豊山教学大会紀要』26 1998)参照。

13) 別本1では「灌頂品第三十一」別本2では「灌頂品第三十三」Tibでは「dbang bskur ba'i cho ga rim par phye ba」(灌頂儀軌品)

14) 『大正蔵』18巻 P. 624b

15) Toh. No. 807 203a

/lha rnams thams cad legs mchod de/ /sbyin sreg ci dgar byas nas ni/
 /sngar bkod ba yi bum pa la/ /rang gi sngags kyis mngon bar bsngags/
 /lha yi mdun na gang 'dug pa/ gcig ni rang gi sngags kyis bzlas/
 /dkyil 'khor dbus na gang 'dug pa/ /rig ba'i rgyal bos bzlas brjod bya/
 /sgo yi drung na gang 'dug pa/ /rdo rje khre bos bzlas brjod bya/
 /snying po'i rigs kyi rig sngags kyis/ /shar gyi grva gnyis bzlas brjod bya/
 /las kun byed pa'i gsang sngags dang/ /de bzhin gsang sngags gzhan kun gyis/
 /nub kyi grva gnyis 'dug pa yi/ /bum pa la ni tshul bzhin bzlas/

16) 『大正蔵』18巻 P. 603c

17) 『大正蔵』18巻 P. 603c

18) 『大正蔵』18巻 P. 603c

19) 『大正蔵』18巻 P. 604a

20) 『大正蔵』18巻 P. 604a

21) 『大正蔵』18巻 P. 604a

22) 『大正蔵』18巻 P. 607c

『蘇悉地經』にみられる灌頂儀礼をめぐって（駒井）

23) Toh. No. 807 175a

/rigs kyi snying po 'bru gsum pas/ /so so bzbs brjod byas pa yis/
/ku sha yi ni bsang byed kyang/ /srin lag la ni gdags par bya/
/ji na jik ā ro lik /bajra dhṛk

24) このような詳細な分類訳が見られるのは漢訳のみである。蔵訳と比較をすると、漢訳者の補遺と考えるのが妥当のようである。この問題に関しては高田順仁「『蘇悉地經』「真言相品第二」の考察—胎密蘇悉地羯羅經觀と三部諸尊の分類—」（『密教学』32 1998）に述べられている。

25) 『大正蔵』18巻 P. 604a

26) 『大正蔵』18巻 P. 604a

27) 『大正蔵』18巻 P. 604a

28) 『大正蔵』18巻 P. 624b

29) Toh. No. 807 203b

/dang po bgegs rnams bsal ba'i phyir/ /dbang bskur ba ni rab tu sbyar/
/bar du bar ma dag gis ni/ /mjug tu rang gis bzlas par bya/

30) 『大正蔵』18巻 623c

31) Toh. No. 807 201b

/sgrub pa'i phyir ni dgos pa rnams/ /thog mar yid la legs bsams te/
/blo dang ldan pas yo byad ni/ /thams cad legs par bsog par bya/
/sbyin sreg las kyi cho ga yis/ /gsang sngags yongs su tshim byas te/
/dbang bskur cho ga gsungs pa'ng bya/ /de nas bsgrub pa brtsam bar bya/

32) 『大正蔵』18巻 603b

33) Toh. No. 807 168b

/di dang ldan par gsang sngags rnams/ /bsnyen na myur du 'grub par 'gyur/
/di ni rigs rnams thams cad kyi/ /rig pa'i rgyal po mthu chen yin/

〈キーワード〉 灌頂、蘇悉地經、成就